Peter Max

YES JAPAN TOUR

"AN EVENING WITH YES"

公演日程

9月29日(木) 大阪 大阪城ホール
主催：毎日放送/FM802
後援：ビクターエンタテインメント
提供：キョードー大阪

9月30日(金) 香川 香川県民ホール
主催：KSB瀬戸内海放送/FM香川/デューク
後援：ビクターエンタテインメント
提供：デューク

10月1日(土) 福岡 九州厚生年金会館
主催：TNCテレビ西日本/クロスエフエム
後援：ビクターエンタテインメント
提供：B.I.C.

10月4日(火) 東京 日本武道館
10月5日(水) 東京 日本武道館
主催：テレビ朝日/JOQR文化放送
後援：bay fm「パワー・ロック・トゥディ」/ビクターエンタテインメント
提供：API/オデッセー

10月6日(木) 宮城 仙台サンプラザホール
主催：仙台放送/仙台放送エンタープライズ/エフエム仙台
後援：ビクターエンタテインメント
提供：G.I.P.

10月10日(月) 名古屋 名古屋市総合体育館レインボーホール
主催：中京テレビ放送/ZIP-FM/サンデーフォークプロモーション
後援：ビクターエンタテインメント
提供：サンデーフォークプロモーション

10月11日(火) 広島 新広島厚生年金会館
主催：TSSテレビ広島
後援：ビクターエンタテインメント

企画制作・提供：API/オデッセー
協力：F.B.I. JAPAN

BIOGRAPHY

エンドレス・ドリーム

イエスはこれまで常に時代を先取りして来た。その理由は簡単：イエスは決して過去をくり返すことなく、むしろ将来に向かって前向きに進んでいるからだ。「もしイエスが、新しいアルバムを作る際に“Close TO The Edge”や“90125”に未練を感じて振りかえっていたとしたらそれは後進的なロックで、進歩的なロックとは正反対なものになり時代を逆行することになる。」とコメントするのは、多面性を持つギタリスト/ソングライター/プロデューサーのトレヴァー・ラビン。「70年代のバンドが過去を再現しようと試みるのはかなり危険なこと。」と続ける。80年にそうしたように、90年代のイエスは、また新たな曲面を見せるのである。

アルバム『Talk』への旅路は、25年前に始まった。今では伝説的なアーティストと呼ばれるジョン・アンダーソンとクリス・スクワイアの、ロンドンのラ・シャッセというクラブでの出会いが全ての始まりだ。ザ・フェデラルズの元キーボード、トニー・ケイと、ザ・シン(Syn)時代、スクワイアのバンド仲間だったギタリストのピーター・バンクス、そしてドラマーのビル・ブラッフォードの3名を加えて、イエスがスタートしたのである。最初からイエスには彼らなりの信条があり、時代を導いて行こうという姿勢を持っていた。それはロックンロールのわくを広げ、それまでの予想を超えるレベルの芸術性を追究しようというものであった。アンダーソンとスクワイアはロックの生々しいパワーと興奮を、クラシック音楽の複雑さ、豊かさ、そしてジャズの開放性をミックスして何かマジカルなものを生み出そうと夢見たのである。ハーモニーとインストゥルメンタル性がグループのサウンドの中心とも言えるもので、イエスは、後に“革新的”もしくは“芸術的”なロックと形容されるサウンドの先駆者となった。そして、ピンク・フロイド、エマーソン・レイク・アンド・パーマー、キング・クリムゾン、ジェネシスなどと共に全く新しいジャンルのロックミュージックを創り出したのである。

イエスの最初の2枚のアルバムは好評を博し、全ヨーロッパに大ブームを巻き起こした。“Survival”、レノンとマッカートニー作曲のビートルズヒットである“Every Little Thing”などの曲は、新人としては人が羨むほどの大ヒットとなり、純粋にイエスを表現する代表作と言われる。次のアルバム、『Time And A Word』ではさらにイエスの守備範囲を広げた。ロック/ジャズのアレンジにオーケストラのみずみずしさと深みをプラス。このアルバムを通してイエスはさらなる発展をとげたのである。

『Time And A Word』の後、バンド内では初めてのメンバー変更を経験。若く才能溢れるギタリスト、スティーブ・ハウが加わったのだ。すると全てはより良い方向に運び始め、1971年にリリースされた、『The Yes Album』は彼らをスーパースターへの軌道に乗せる結果となった。“I've Seen All Good People”、“Yours Is No Disgrace”、“Starship Trooper”などを代表とする、今までより長く複雑な拍子で複数の楽章によって構成された曲の数々を満載したこの『The Yes Album』は、バンドの個性と力強さを世に知らしめるものとなり、英国内のチャート第一位に輝いた。全米ツアーを行った後には、全米チャートをものにしたが、待っていたのはトニー・ケイの脱退だった。彼はBadgerという新しいバンドに加わることになったのだ。ケイはイエスをここまで育て上げることに多大な貢献をした。しかし、まずは新しいキーボード・プレーヤーを見つけなければならない彼らだった。

『The Yes Album』がイエスというバンドの登場を表わすとすれば、アルバム『Fragile』は、彼らの存続を示していたと言えるだろう。1971年、若いキーボード・プレーヤー、リック・ウェイクマンが抜擢された。スタジオ・ミュージシャンとしての彼の評価はかなり高く、たちまち、イエスの中での存在感も確かになった。

『Fragile』の9曲は、5人のミュージシャンそれぞれのソロとしての才能を、そして同時に一つのまとまりあるグループとしての力を余すことなく表現している。

“Roundabout”は彼らにとって最初の確固たるヒットとなり、イエスが何を目標としているかをはっきりと示している—壮厳なメロディーと複雑なアレンジの組み合わせである。クリス・スクワイアの稲妻のようなベースは、リード楽器であると同時に、リズミックでもあり、ロック音楽におけるベースの役割の定義を変えるほど。“Roundabout”はたちまちライブのアンコール曲となり今もその地位を保っている。『Fragile』には他にも“Heart of the Sunrise”や“Long Distance Runaround”など、ロックのクラシックと呼ばれる曲も収録されている。

記念すべき成功をおさめた『Fragile』だったが、イエスはまだロック音楽の限界を広げ始めたばかりだった。同年後半、彼らの意志を決定づける進歩的なロックの集大成、『Close To The Edge』をリリース。このアルバムには3つの曲が収録されている。一つはテンポの速いロック、“Siberian Khatru”、美しい“And You And I”、そしてもう一曲は“Close To The Edge”。これは猛スピードの光とエレクトロニクスのシンフォニーで、最初の一音から聴く者の首根っこをつかまえて18分間、時間と空間を引き回して離さないような強烈な曲だ。この叙情的な雰囲気はアルバムの片面全部に通じており、初期のイエスの傑作と言えるだろう。『Close To The Edge』の完成によって彼らのレベルは相当の高さに達し、当初の目標も実現することができた。彼らは全く新たなジャンルのロックを創り出し、何も犠牲にすることなく、強力なファン層を獲得したのである。しかし、この時がブラッフォードにとっては新たな可能性を追究する時期となり、イエスを離れ、キング・クリムゾンへと移籍することになった。

アラン・ホワイトのセッション、ツアーの経験は、ジョン・レノンのプラスティック・オノ・バンド、ジンジャー・ベーカーのエアー・フォース、ジョー・コッカー、ジョージ・ハリソンなど、かなり質が高い。イエスなりの演奏方法をツアーのスタート前、数日間で習得しなければならなかったにもかかわらず、それをいとも簡単にやってみせたのは、多面的で完成されたミュージシャンだったからであろう。ホワイトの騒々しい力まかせのドラムは瞬時にイエス風の、ちがうタイプの演奏へと見事に変化した。1973年のワールドツアーでは、入念に仕上げられた3枚組のアルバム、『Yessongs』と同名のコンサートフィルムを世に送り出した。そのフィルムは当時最も売れたコンサート映画として記録され、ライブ・アルバムの方ももちろん、イエスを最もホットなライブ・アクトを行うグループとして位置づけるきっかけとなった。フィルム、アルバムの両方を通してホワイトの素晴らしいドラムが際立っており、それが今日まで続くイエスの基礎を作ったと言えるだろう。アラン・ホワイトは、1972年から今日に至るまでイエス・マンとして演奏を続けており、彼の妙技は、『Yessongs』から『Talk』まで全てのアルバムで聴くことができる。

『Tales From Topographic Oceans』は、1973年、ツアー中に構想が出来上がった。Autobiography Of A Yogiという題の本の教えにもとづいて作られたこのアルバムは、イエスがこれまでに試みた最も野心的なものである。4つの曲によって構成され、2枚のレコードの4つの面に1曲ずつ収録されている。ファンの間でも最も愛されているアルバムではあるが、これを傑作と呼ぶ人と、一線を超えており、やりすぎだという人に分かれる。イエス自身も、それぞれが目ざそうとする方向のくい違いを感じ始めており、このツアーの後ウェイクマンがグループを離れることになった。新しいキーボードプレーヤー、パトリック・モラーツを加えた彼らは、次のアルバム、『Relayer』のレコーディングに着手した。

『Close To The Edge』と同じように、『Relayer』も一曲に片面全部を使い、裏面にはその曲をアレンジした2曲を入れている。激しく、カミソリの刃のようにシャープな曲“The Gates of Delirlum”や“Sound Chaser”は、ゆったりしていた『Tales From Topographic Oceans』に欠けていた緊張感が戻っている。少しソフトな曲“To Be Over”は失われたクラシックを思わせる。『Relayer』のリリース後数年間のイエスのツアー活動はとても活発なものとなった。『Relayer』の曲は好評で、人気は依然高まるばかり。ツアーでは、フィラデルフィアのJFKスタジアムの10万人という観客動員数を記録

している。

1975年、アルバム『Yesterdays』をリリース。最初の2枚のアルバムより数曲と、1972年にリリースされたポール・サイモンの"America"、そして『Time And A Word』のセッション時にレコーディングされたがアメリカではリリースされていなかった曲"Dear Father"などが収録された。1976年、イエスのメンバーは、初のソロアルバムのレコーディングに着手。1977年、若返りを計ったイエスはリック・ウェイクマンを迎え、ニューアルバム、『Going For The One』を発表。このアルバムは、かつてのような、短く、エネルギーと威厳に満ち溢れた曲が戻ってきている。"Wonderous Stories"はヨーロッパのチャートの上位を占め、"Turn of the Century"は、今までに見せたことのないイエスの新しい一面を見せている。クライマックスとも言えるのは"Awaken"。70年代後半のイエスらしい詩的な形に戻った傑作である。

続いて1978年にリリースされた手ごろなロッカーアルバム、『Tormato』には、コンサートに最適の曲"On the Silent Wings of Freedom"、"Don't Kill the Whale"、"Madrical"が収録されており、クリス・スクワイアのベースギターの妙技が余すところなく活かされている。このアルバムのツアーでは彼らの魅力をフルに発揮できる方法を見い出した。丸い回転するステージをアリーナの中央に設置し、観客席はまわりを円形にとり巻くというものだ。しかし、ツアーの忙しさも頂点に達し、バンド内で摩擦が起き始める。イエスは10年間休みなしにツアーとスタジオ・ワークを繰り返して来たため、変化が必要になっていたのだ。パリでのレコーディング・セッションの後、ジョン・アンダーソンとリック・ウェイクマンがイエスを脱退することになった。

イエスは活動を続け、テクノポップグループ、Bugglesからトレヴァー・ホーンとゲオフ・ダウンズをヴォーカルとキーボードに迎え、ニューアルバム『Drama』をリリースした。『Drama』のツアーが行われ、一応の成功は修めたものの、ヴォーカルのジョン・アンダーソンなきアルバムに、ファンは難色を見せ、ツアーの後イエスは『Drama』の活動を一時中止することになった。

次の2年間は前作を補うかのように次々とアルバムをリリース。1980年の『Yesshows』は2作目のライブアルバム。このダブルアルバムは、1976年から78年にかけて作られたもので、"The Gates of Delirlum"の決定版バージョンを含んでいる。1982年には、グレイテストヒットのパッケージ、『Classic Yes』がリリースされた。このアルバムには、これまでリリースされていなかった"Roundabout"と"I've Seen All Good People"のライブ・トラックが加えられている。クリス・スクワイアとアラン・ホワイトは共同制作を進めており、"Run With The Fox"というシングルをリリースした。これはイエスの精神が健在であることをファンに証明することとなった。しかし、その精神がどんなにしっかりと根を降ろしているか、この時だれが予想していただろうか。

南アフリカ生まれのトレヴァー・ラビンは、その時すでに3枚のソロアルバムと、以前所属していたバンド、ラビットからリリースしたアルバムの数々、そしてその他にも沢山の版権を所有していた。秀れた技術とクリエイティブな作曲スタイルを兼ね備えた優秀なギタリストである彼の音楽は、みなぎるエネルギーに満ち溢れ、ユニークな存在感を放っていた。当時新たなソロアルバムを企画していた彼は、スクワイアとホワイトに紹介された。この組合わせは驚くほどぴったりマッチし、彼ら自身をシネマと名付けることになった。イエス創設当時のキーボードの、トニー・ケイを加え、イエスというグループ名を使わずに活動を始めた。

しかし、スクワイアがアンダーソンにデモテープを聴かせるやいなや、たちまちアンダーソンはそのアイデアのとりことなり、大きなプロジェクトへと発展。こうして、新しいイエスが誕生したのである。グループ名をイエスとすることは、自然な成り行きであった。こうして出来上がったアルバムは、アルバムのカタログ番号をとって『90125』と決まり、1983年の11月にリリースされ、大ヒットとなる。『Drama』のヴォーカリスト、トレヴァー・ホーンにプロデュースされたこのアルバムは、イエスのサウンドを新しく、モダンでクリーンなものへと変えた。『90125』はたちまちバンドの最高売上げを記録し、ラビンの書いた曲"Owner of a Lonely Heart"は全米でナンバー1シングルに輝いた。

なじみ易いと同時にイエスの伝統である前向きな姿勢を打ちだしたこのアルバムは、昔からのファンの心をつかむと共に、新しいファン層をも獲得した。このアルバムには80年代のイエス賛歌とも言われる"Changes"、他にはヒット・シングル"Leave It"と"It Can Happen"が収録されている。

「シネマには相当な思い入れがあった。」と、アラン・ホワイトは語る。「その情熱は、『90125』を聴いてもらえば解るはず。リハーサルに8ヶ月を費した。この成功は、新しいサウンドに対する努力のたまものなんだ。」

イエスは新しいステージ・セットとレーザー・ライトショーをひっさげて世界ツアーに出発。どのコンサートもチケットは完売であった。『90125』ツアーのエネルギーは、EP『9012 Live-The Solos』と、ホームビデオ『9012 Live』に収録された。ビデオはツアーをドキュメンタリー風に記録し、EPは、バンドのメンバー一人一人の才能を聴かせるハイライトの役割を果たしている。

次にリリースされたのは『Big Generator』。トレヴァー・ラビンは作曲能力のみならず、プロデューサーとしての才能をフルに発揮している。『Big Generator』にはおなじみのYesソング、"Love Will Find A Way"、"Rhythm of Love"(以前シングル・リリースされた)、そして少し長くムードのある"Shoot High Aim Low"が収録されている。その後再び目まぐるしいワールドツアーが行われ、更なるチャレンジを求めるジョン・アンダーソンは、イエスを離れることになった。古い仲間達と接触した結果、彼は『Anderson Bruford Wakeman Howe』というレコードを出し、一方、イエスは4人のグループとして活動を続けた。トレヴァー・ラビンは『Can't Look Away』というソロアルバムをリリースする機会に恵まれ、彼自身のツアーに出た。当時は2つの実体がイエスとして同時に存在していたが、その後には新たなステップが待ち受けていたのだ。

『Union』は、アンダーソンの長年の夢の実現であった。「同じ旗の元で飛ぶこと、イエスの旗を90年代にはためかすことが重要だ。」と、アンダーソンは言う。そしてそれはまさに彼らが成しとげたことである。ロックの大物達の活発なエネルギーと、ヒットを生み出す才能が組み合わさった現代的な8人編成のイエスの再出発。最初のシングル"Lift Me Up"はヒットとなったが、アルバム『Union』の全部が完璧だった訳ではない。アルバムにはまとまりのなさが見られ、人数の多いバンドでツアーを回るのは難しかった。『Union』は、画期的な前進であったが、更なる動きが必要だったのだ。

イエスは『Big Generator』当時のラインナップで活動を続け、それが最も成功だったようだ。ラビンとアンダーソンはサン・クレメント海岸のモーテルに泊まり込み、後にアルバム『Talk』となるデモ作りにはげんだ。「ただただ、演奏し続けた。」とラビンは振り返る。「テープの録音と再生をくり返し、アイデアのつまったカセットの山をかかえてスタジオ入り。ジョンと僕には強いパートナー意識が育ち、今ではとても満足し、幸せに思っている。」

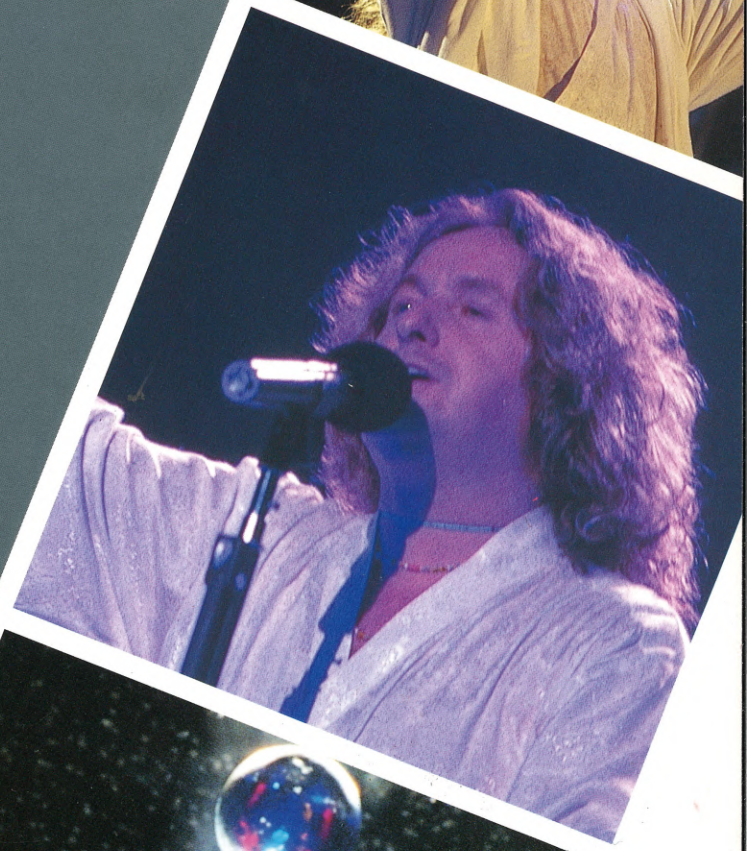
再びイエスは、技術の最先端を歩み始める。ラビンは、最近のレコーディング技術を駆使して『Talk』のレコーディングにあたった。これは、テープを使わずにコンピューターだけでレコーディングを行った最初のアルバムとなった、ハイテクの音楽である。"The Calling"は、これまでのイエスの中で、最も覚えやすい曲に仕上がった。"State Of Play"は今までのイエスにないタイプのロック、そして"Endless Dream"と"Where Will You Be"はムーディーな作品だ。

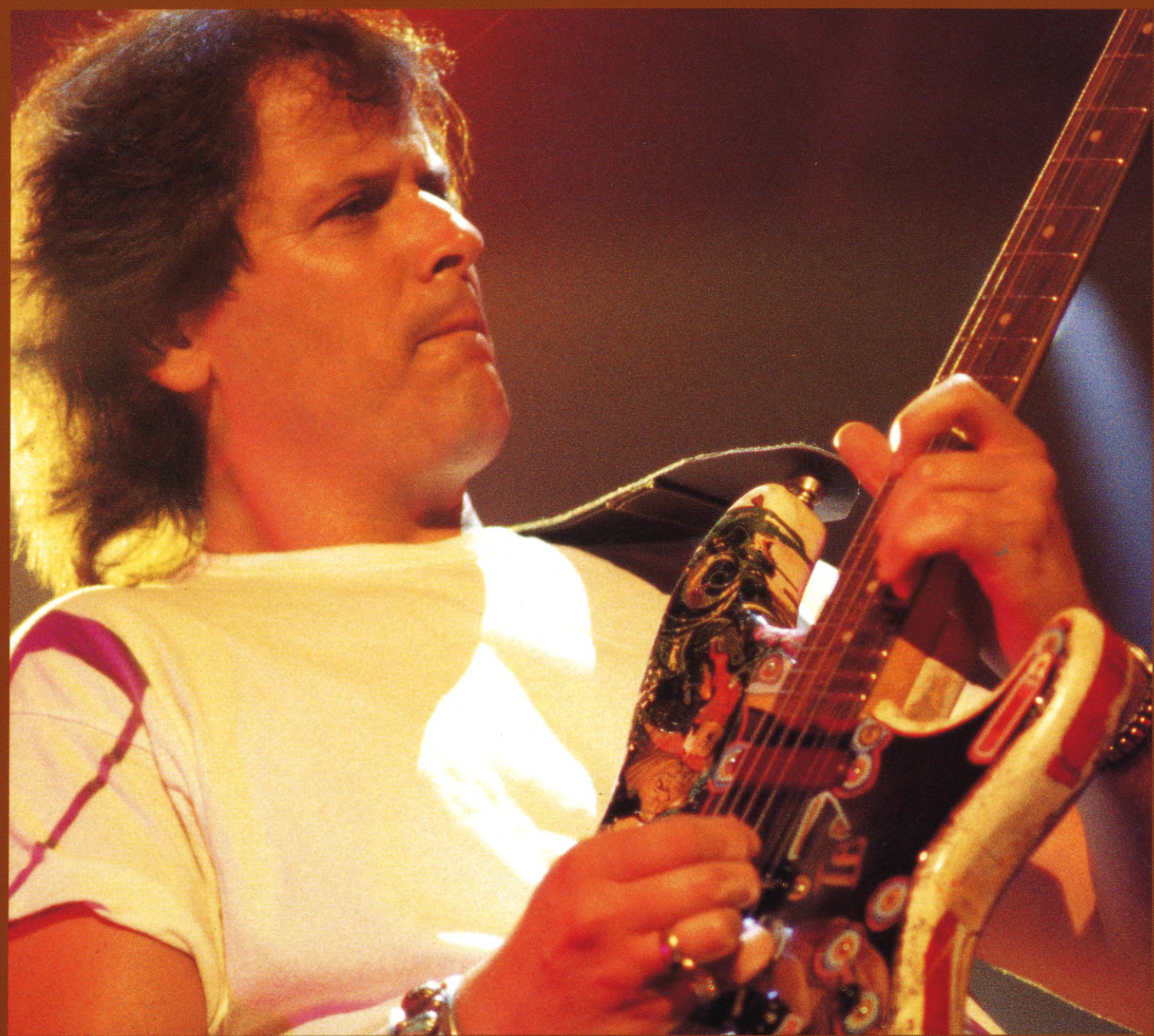
新しい領域に足を踏み入れたイエス。再びイエスは時代を先取りし、革新的なロックを続けて行くのである。

By Glenn Gottlieb and Douglas Gottlieb

Jon Anderson

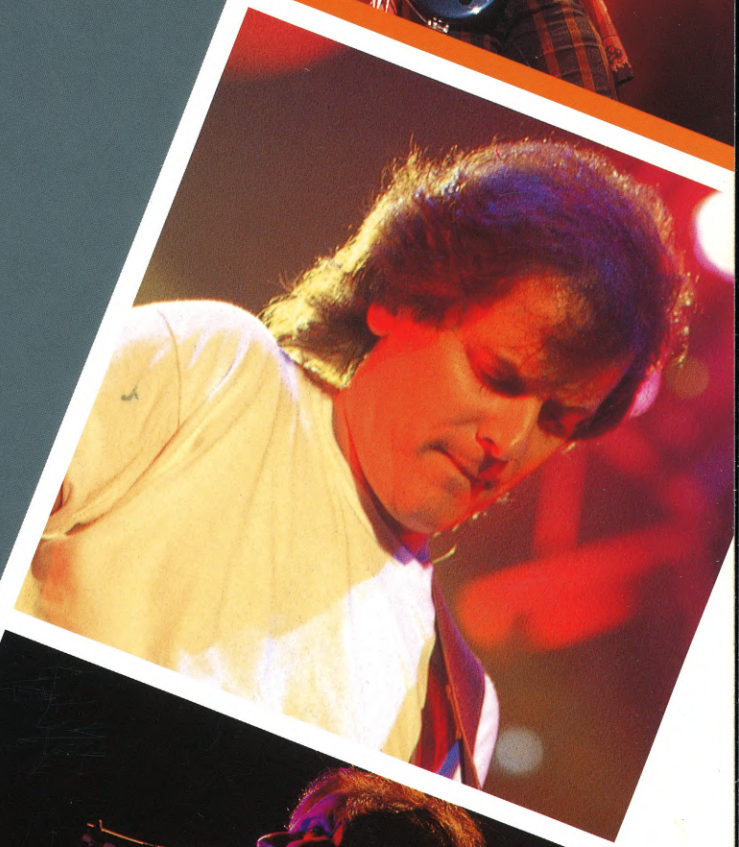
vocal

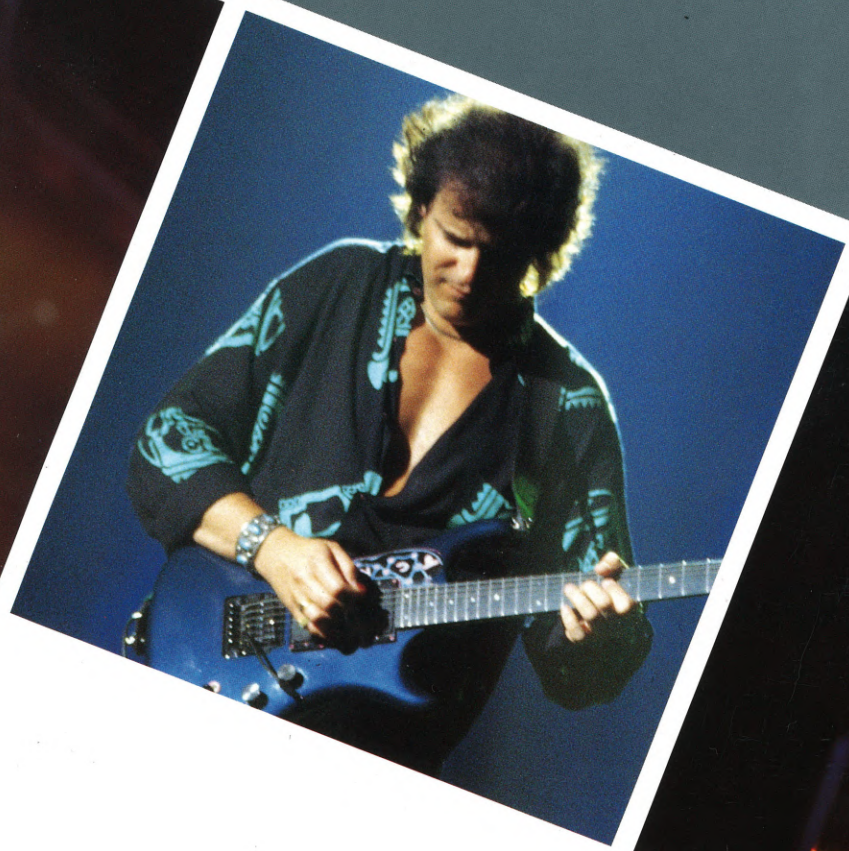




Trevor Rabin

vocal guitar keyboard program





Tony Kaye

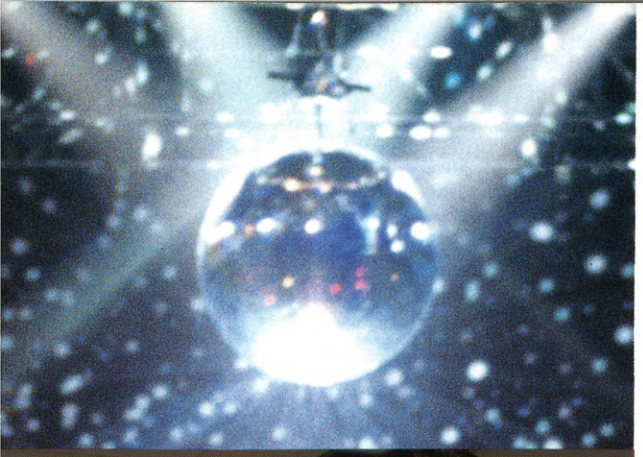
keyboards
YAMAHA

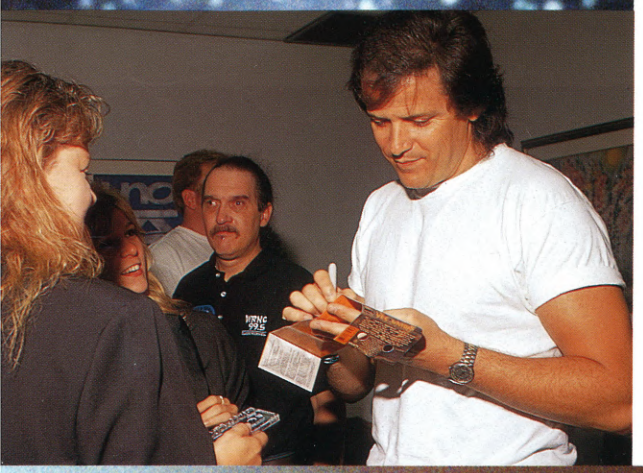
Chris Squire

vocal
bass

Alan White

drums





Vocal: JON ANDERSON
Vo/Guitar/Keyboard/Program: TREVOR RABIN
Keyboards: TONY KAYE
Vo/Bass: CHRIS SQUIRE
Drums: ALAN WHITE

YES CREW CREDITS-1994 JAPAN

Personal Manager: TONY DIMITRIADES
Personal Manager: ERIC BARRETT
Tour Manager: CHRIS POLLAN
Assistant Tour Manager: PETER MACKAY

Production Manager: GRAHAM HOLMES
Production Assistant: KAREN HOLMES
Drum Technician: JIM ROBISON
Keyboard Technician: ROBBIE EAGLE
Guitar Technician: PAUL LINFORD
Bass Guitar Technician: RICHARD DAVIS
J.A. Technician: JOHN LARAIO
Stage Manager: MARK REINKE
Stage Carpenter: JEFF GILREATH
Lighting Director: PERRY ALLEN
HSE Sound Engineer: DAVE NATALE
MON Sound Engineer: DAVE SKAFF
Assistant MON Engineer: CHAD SHREINER

Varilite Operator: SAM DeLEO
Lighting Technician: BILL CONTE

Tour Accountant: JOHN FARROW

Photographer: KRISTIN CALLAHAN
TAMI FREED
DAVID KING
Merchandising: WINTERLAND PRODUCTIONS, RICK FISH

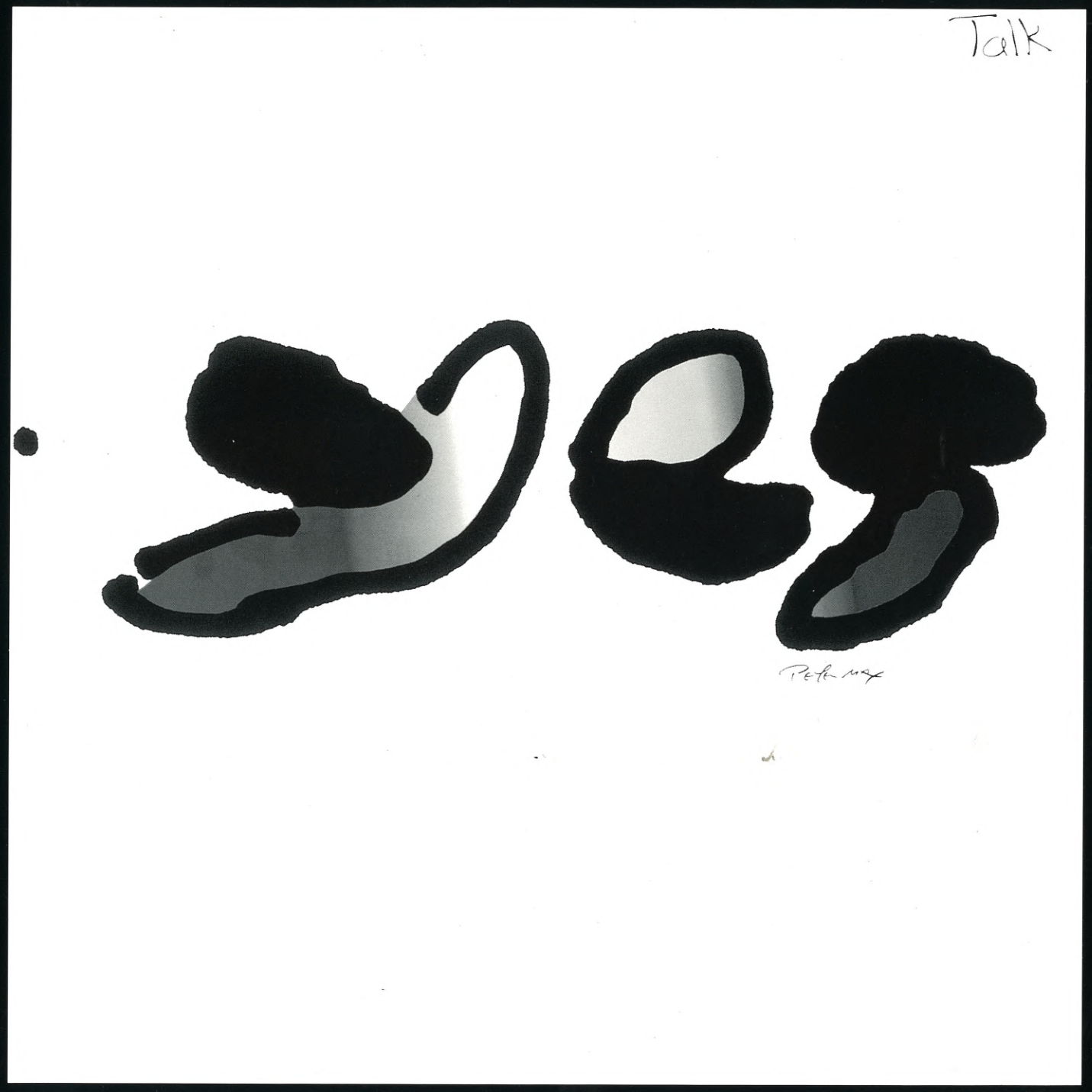
JAPANESE STAFF

Promoter: API(ADVANCED PROMOTION INTERNATIONAL INC.), SOICHIRO KIMURA
Production Coordinators: KSF, SHIGERU SUGIYAMA
Lighting: VARI-LITE ASIA, SATOSHI KOBAYASHI
BIG 1, KAZUHIRO YOKOYAMA
MEDIAFACE (MARTIN ROBOSCANS), MASAAKI SAKAMOTO
Sound: CLAIR BROS. JAPAN, HITOSHI ITO
Staging & Rigging: SHIMIZU BUTAI/S.S.R., TAKESHI KOBAYASHI
Trucking: RONDO, MASAKATSU SONODA
Catering Service: KEN & STAFF

PRINTED IN JAPAN BY DENTSU/WINTERLAND

Victor JVC Victor Entertainment, Inc.

進化!? 回帰!?



大ヒット作"ロンリー・ハート"を生み出したメンバーによる最高傑作。ヒット・シングル「コーリング」、泣きのバラード「アイ・アム・ウェイティング」、スーパー・トランプのロジャー・ホージソンとの共作「ウォールズ」など、ポップ&キャッチーな楽曲から、約16分に及ぶ大作「エンドレス・ドリーム」まで、イエスの、あの音がぎっしり!!

YES new album TALK

YES

Jon Anderson (Vo) Trevor Rabin (G, Kbds, Vo, Programming, Producer)
Chris Squire (B, Vo) Tony Kaye (Hammond Organ) Alan White (Ds)

1. THE CALLING 2. I AM WAITING 3. REAL LOVE
4. STATE OF PLAY 5. WALLS 6. WHERE WILL YOU BE
7. ENDLESS DREAM
a) SILENT SPRING b) TALK c) ENDLESS DREAM
8. THE CALLING

日本盤ボーナス・トラック追加収録

CD VICP-5355 ¥2,500(税込) ●解説・歌詞・対訳付

絶賛発売中!!